

甲状腺外科草子 84

武田典厩信繁の九十九箇条 (後)

杉野圭三

典厩九十九箇条の中には「戦場での心得」もあるが省略し別の機会とする。

55.毎事争(あらそ)ふ儀、敢へて為すべからざる事

56.善悪能く正すべき事。『三略』に云、一善を廢する時は衆善裏(おとろ)ふ、一悪を賞する時は衆悪帰す(一つの善を廢すれば多くの善が減び、一悪を賞すれば多くの悪が起こる)

58.毎篇功作なくして、立身為しがたく候事。云く、千里の行も一步より始まる。(全てに功績がなければ立身は難しい、『老子』に千里の道も一歩からとある)

60.過(あやまち)を争ふべからず、自今以後嗜(たしなみ)肝要の事。語(論語)に云く、過ちては則改むるに憚ること勿れ。亦云く、過ちて改めざる、是を過と謂ふ

61.深く思ひ立つ儀ありと雖も、余儀なき異見に就いては、その意に任すべき事。語に云く、信をば義に近ふせよ。言複(ふん)ずべし。(心中深く思い定めた事も、どうしようもない意見にぶつかった時は、その意見に従え。『論語』に人との信は義に近い時に履み行えとある)

64.無行儀の人に近づくべからざるの事。『史記』に云く、其の人を知らずんば、其の友を視よ。

65.余りに人を疑心すべからざるの事。『三略』に云く、三軍の禍は狐疑に過ぎず(軍中の禍は疑い深く、決断に欠けることである)

66.人の過ちを批判すべからざる事。語に云く、好事をば他に与えよ(他人に友誼を尽くせ)

67.嫉妬の咎、堅く申し付くべき事

68.佞人の心持つべからざる事。『軍識』に云く佞人上に在れば、一軍皆訴ふ(へつらう者が上になると、兵の訴えが増える)

71.夫丸(ぶまる:夫役に従う者)に情けを加ふべき事。『尚書』に云く、徳は惟善き政なり、政は民を養ふに在り(徳とは善政を施すことで、為政

とは民の生活を守ることである)

75.人の聳肩・偏頗(へんぱ)すべからざる事。『考経』に云く、天地は一物の為に其の時を枉(ま)げず、日月は一物の為に其の明を晦(くら)まさず。明王は一人の為にその法を枉げず(人を依怙聳肩したり不公平に扱ってはならない。『考経』に天地は一物のために運行を乱さず、日月は一物のために明るさを暗くせず、賢明な君主は一人の為に、法をまげない)

86.下々の批判、能々(よくよく)聞き届け、縦(たと)ひ如何様に腹立候とも堪忍あり、隱密を以て工夫すべき事

91.其の徒党を立つべからざる事。語に云く、君子は周して比せず、小人は比して周せず(徒党を組むな、『論語』に君子は広く交わりおもねらないが小人はおもねり広い交わりがない)

98.毎事油断すべからざる事。『論語』に云く、吾日に三たび吾身を省みる

99.毎事、退屈すべからざる事。『孟子』に云く、孜々(しし)として倦(う)まざる者は舜(しゅん)の徒なり(氣力を無くし怠ってはならない、『孟子』に聖人の道をつとめ励んで怠ることの無い者は舜(五帝の一人、聖人)の徒であるとある)

以上、九十九箇条

多言漫(みだり)に他人の耳に喧(かまびす)し、寧(むし)ろ往生の書にあらざといふことなし(遺言ともいうべきものであろうか)

永禄元年(1558) 武田左馬之助

武田信繁が単なる武将でなく、古典・書籍への造詣が深く博識、寛大で極めて優れた行政家・指導者であることが良く分かる。武田軍団をまとめた中核の人物と確信する。

名文であり原文で読むことを勧める。「コピペ」ではないので誤記があれば寛恕賜りたい。無駄のない明瞭・簡潔な文体だが、浅学にして訳文が無ければ難解だった事を告白する。

参考資料: 甲陽軍鑑(佐藤正英)、Wikipedia

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2023年12月1日